螺旋階段

七夜ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
螺旋階段

【Ｎコード】
Ｎ８２８１Ｅ

【作者名】
七夜ソラ

【あらすじ】
ソラが書いた詩集です。これを読んで、何か思ってくださったら嬉しいです。

諦め

目指したもの
望んだもの
手に出来ないと
すぐ諦めて
伸ばした手を
そっと握り締める
そこに見つけたのは
小さな、小さな、光
それでも太陽に負けないように
大きな光を放っていて
それは私には眩しすぎて
見つめる事さえ叶わない
こんなちっぽけな光にさえも
私は勝てない

どうしてこんなに一生懸命になれる？
努力したって
大きな太陽に敵うはずないのに
意味ないのに
いつだってそう
私の前にはいつも大きな敵が
勝てるわけない
初めからわかる
だから目指すのをやめたの
無意味な事をして何になる？
無駄なだけ
傷ついて
泣いて
落ち込んで
僻んで

ひとりで馬鹿みたい

でも、この光はそれをしている

諦めずにずっと輝いている

昔の私はこの光みたいだったのだろうか

この光を直視することができたの

過去を振り返ることはできても

戻れはしない

でも、未来は変える事が出来る

この光に見習って

作ってみると

あまりにも簡単なことで

いままでの自分が

馬鹿みたい

自由になったら
大空を羽ばたいて
高い、高い、太陽も
目指せるほど高く
羽ばたけて
毎日新たな未来を築いてゆく
明日は太陽を手にできると
信じてる
いつか必ず
絶対に手にするときを
前だけ見ているから
諦めずに今日も
羽ばたいていける

時計

春の風に乗って漂う花びらが
日に日に多くなっていく
風が吹くと目の前に広がる桃色
春の臭いをかいで背伸びして
ぶかぶかの制服に身を包み
君の会うために駆け出す
気づけば全速力
息があがってるのさえ気づかない
君の目の前まで駆けていく
肩で息をしながら
君の前で微笑む
満開の桜の下の満面の笑み
楽しかった
君といれば辛いことも苦痛ではなかった

なぁ、君もそうだろう？
あっという間に三度目の春
もうそろそろ別れの時
その別れが永遠なんて僕は知らなかった
だから誓った君と再び会うことを

外の光は日に日に強くなるばかりで
蝉が五月蠅く鳴いている
君はどこへ行ってしまったの
ただ会いたい、それだけの小さな願いなのに
どうして？

山の色は一変して
赤や黄のコントラスト
そこに隠れた寂しさ
散り行くのはいつかと

冬はもう目の前にあるから
ねぇ、僕に気づいてよ

あの時の制服もいまやどこにあるのか
長い長いじかん
涙さえ枯れはてて
心に空いた穴
君がいたのは幻だったのだろうか？
そう思うようになっている自分がいる
空を見上げては何かを思って
なぜかそこに君がいるような気がした
気のせい？でも、
すこし肩が軽くなったような気がした
窓を開けて身を乗り出すと
温かい風が僕の頬をなでた

やさしく、そっと

嗚呼、君はそこにいるのかい？

答えてくれるものなんていないけど

確かに僕はそうかんじたんだ

待たせてごめん

もうすぐ僕もそっちに行くから

待ってて

ほんの少しの間だけ

寂しくないよ

だって今までもそうだったでしょ？

兄弟（前書き）

私の大好きなあるアニメの詩です。

兄弟

僕の初めてできた
たった一人の家族
僕を利用してたなんて嘘でしょう？
そんな嘘すぐに分かるよ
僕たち兄弟だからね
僕は兄さんの役に立つことができたかな？
大好きだよ、兄さん
兄さんにとって、僕は偽者だけど
僕にとって兄さんは
本当の兄さん以上の存在だったんだ
たった一人の家族
誕生日、プレゼント嬉しかった
初めて迎えた誕生日
僕の凍った心が溶けていく

兄さんと過ごした想い出は忘れないよ
大事にしてくれてありがとう
もっと一緒にいたかった
本当の兄さんの弟として生まれたかった
でも、僕は今とても満足だよ
だって兄さんのために死ねるのだから・・・
大好きだよ、兄さん

何もかも失った
希望、未来
俺はなにをすればいい？
教えてくれるものさえいない
嗚呼、弟よ
俺はお前を憎んでいた

なのに、
この引き裂かれるような胸の痛みはなんだろう？
知らず知らずのうちにお前を本当の兄弟と感じていたんだ
どうしてこんな奴のために命を捨てる？
死ねると思ったのに
死ぬのはいつも俺じゃなくて、俺の大切な人
失ったものを奪い返さなければ
無くしたものは俺が作る
ゼロからの創造
裏切り、憎しみ
孤独な感情は増すばかり
そう、自分のためだった
上手く操って使ってきた
俺は王だ
コマはいらない

取り戻したいのは

家族、愛

だが、それは遠のいていくばかり

復讐は遂げた

だが、孤独感は増すばかり

でも、これでいい

自分だけを犠牲にしていればいい

大切な人、今度こそ、

会いに行くから

兄弟（後書き）

できが悪いので良く分からなかったかもしれませんが、弟から主人公（兄）の詩に替わっていく感じで書きました。

ひとり

憎悪

憎しみは強まり高まる

欲しいのは牙と爪

必要ない心

捨てて孤独に浸る

孤独

なれたはずなのに

1人で生きていくって決めた

たったひとり

周りは敵ばかり

信じられるのは自分だけ

自分を殺して

人格を作る

すべてをだます
自分さえも
つくりものの自分
消えた本当の自分
とうに忘れた
私は誰だ？
わからない
誰も教えてくれない
みんな死んでしまった
なんのために存在している？
この気持ちはなんだ？
自分さえも信じられない
孤独
押しつぶされそうになる
自分を抱きしめる腕に

温もりを感じる
確かに存在する自分
生きている
心が枯れ果てても
感じる鼓動
目に映る
流れる血に実感した

たったひとり
恐れる事などない
失うものなんてもうないのだから
巨大な壁さえ自分の目には映らない
進み続ける
終着点など存在しない
運命からは逃れられない

そう決まってたんだ
自分がここに生きている限り
空が蒼く澄み渡る
この世界
自分の存在する場所など存在しない
独りで生きる
そう決めた日から
自分は存在しない
誰の心からも忘れ去られた存在
必要としていないものだったのに
一番大切だった
そのことには創めから知っていたんだ
取り戻せない
取り戻さない
独りで生きると決めたその日から

黒蝶

目に映るのは確か
果てしなく遠い空
白い雲
風を切り進む翼
そんなことさえ過去の記憶として消える

空を臨んだ
闇の空さえも
落ちたしずく手にとることさえできずに
こころに突き刺ささる

いつになったら消えてくれる？
孤独と不安
飛べない鳥

見ることさえできない翼
私は哀れな存在なのですか

世界観

他人とは異なる世界
目に映るは土色だけ

閉ざすことにした瞳
二度と開かない
見たくない
自分の真実を

奪われた自由
感情はどこへ
あの鳥のように
高く高く飛んで

空の果てへと消えてしまいたい
目に映ることのない
あの蒼い空の果て

抜かれた翼
戻ることは二度とない
たびたび振り返ってはあの時を思う

哀れな鳥よ
飛ぶことさえ叶わぬ
生きる意味
価値など存在しない
私はただ
世界の果ての小ささよ
多くは望みはしない

ただ風になれるのなら
命などもういらない
ただもう一度
あの空を
自由を手にしたいだけ

哀れみなどいらない
一人で生きる
生まれた時から
味方などいない
たった一人の存在
消えさってしまっても
誰も気づかない
小さな光
私にも何かを照らすことができたなら
だれかに必要とされたなら

世界に存在意味があったなら
よかったのに

暗い闇

私の光では打ち勝つことは出来ずに
飲み込まれていく
逃げられない
助けも届かない
底に落ちていく
深い闇へ
一人落ちたい

心中（前書き）

今回は短い詩が３つです。

心中

蒼空を仰いで
届きもしない光に
手を伸ばして
鳥が空を翔る
何を想う
夢にもならない
届かぬ光
握りしめてみても
刹那の間さえ
満たすことも出来ず
永久の感情
込み上げられ
溢れる痛み
胸を貫く

愛する気持ち
つかむのは遅すぎて
全て消えたあと
たった独りきりで
天を仰いだ
頬に雨がつたう
残ったのは孤独
悲しみ、絶望
自分自身の翼を折る
心に突き刺さるは
記憶の破片
煌めく光を浴びて
さらに輝く雨に
何を映し出す

戻らない
遠い心の形

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

蒼空から降り注いだ
灰色の雨

潰して取り戻す
奪われた世界
消えたこころ

灰色の水の中
映したものは何よりも
わたしを知っているのだろう

何のため戦い続ける？
あの日を取り戻すため

蒼空から降り注いだ
灰色の粒

破壊して無くす

壊れた世界
偽りの自分

あの日はもう戻らない

消えない罪
許されない

守るものも失った

深く染まるこころは
独り灰色になっていく

こころから笑える日は
二度と来ない

闇雲が晴れていく
自分に世界に終止符を
与えるのさえ自分、一人

落ちる雨
くすんだ世界

もう一度あの日々を

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

空は晴れているのに
自分の上にはいつも雲一つ
雫が流れ落ちる

全てを包み込む
大空さえ
味方はしてくれない

太陽の光
私の上だけには
射し込まない
いつも灰色の中に
佇む
小さな陰

矛盾（前書き）

コメントくれた方ありがとうございます。（＾＾）
メチャクチャ嬉しいです！！
励みになります★

矛盾

耳に届く声
かすかな声
でも、
たしかに聞こえた
誰？
何をしてほしいの？
どうして？
無関係でしょう？
僕には関係ない
僕は独りだから
僕の存在が孤独
生まれたときから

死んでた
誰にも認められない存在
でも生きてる
だけど死んでる
矛盾
何がいけない
誰にでも存在する
人間なら
僕は人間？
何ものでもない
消えそうな存在
存在してるかさえわからない
無関心
傷つかなくてすむ
誰が？

わからない
解らないのに
その誰かのために
背負い続ける
誰？
言わないで
聞きたくない
知りたくない
答えなんて必要ない
存在しない
こころの底では解ってる
何を？
認めたくないんだ
存在しないのに？

独りにして
つながりを持ちたくないんだ
関わりを持つのが怖いんだ
僕のこの手は誰も救えない
傷つけるだけ
触れないで
近づかないで
言葉をかけないで
優しくしないでよ

憎んで
爪を立てて
僕を傷つけてよ
君のために血を流させてよ
生きてるって示してよ
一人にしてよ

独り闇に閉じ込めてよ
闇へ消えたい
消えさせて
消してほしい
僕の存在
最初からないけど
消してほしい
僕がいた世界
たしかに生きてきた道を
解放して
孤独
死
不安から
全てから

解放してよ
独りはやだよ
死にたくないよ
怖い
闇に取り込まれる
逃げたい
怖い
暗いよ
誰かそばに寄り添ってよ

矛盾（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました（ｍ

欲望

振り返りたくない
前に進みたい
けっして止まりたくはないんだ
後戻りは出来ない
僕と君

生きたい
僕は生きるんだ
君と出会ってそう思えた
はじめて自分で認められたんだ
やっとそう思えた

時間がない
はじめて時に逆らいたいと思った
止めたいと思った

今、確かに僕は生きてる
時間がほしい
もっと君と一緒にいたい
僕にとってのたった一人の存在
大切なんだ
大好きなんだ
離れたくないんだ
ずっと一緒にいたいんだ

どうしてなの
待ってくれないの
もう少し
一分でもいい
一秒でもいい
もっと少なくてもいい

一瞬でも君の手を握らせてよ
ずっと握らせてよ
死にたくないよ
消えたくないよ
君の側にいたいよ
離れたくないよ
怖いよ
おいてかないで
独りにしないで
どうして一緒にいられないの
どうして？
こんなにも思っているのに
こんなにも願っているのに
助けて
もう一度

わがままな僕を救ってよ
手を伸ばして
闇から引きずり出してよ
僕の名前を呼んで
触れて
掴んで
おいてかないで

分かってる
逆らえない運命
そう
僕が望んでしまったから
もう戻れない

だけど
多くは望まない

少しだけだから
笑いたい
そうそれだけ
もう一度
君と
笑いたい

ありがとうと
伝えたい
君は生きろと言いたい
僕の分まで生きてほしい

闇に落ちていく
たったひとり

星の数

隠れた光
離れていく
現れた雲
近くに来て
空を覆う

暗い空
遠い切れ目

後悔は雨の粒より多く
心は雨雲より黒く
望んだことは見えない太陽よりも解らない

後悔はしたくない
しないように生きなさい

誰かが言ったけど
そんなの無理でしょう？
そういう君は何を悔やんでいるの？
聞いてみても決して教えてくれない
口外できる後悔なんて本当の後悔じゃないと君は言う
本当の後悔って何？
したことの大きさ？
苦しんだ時間？
基準は何？
あなたの後悔だけが基準？
他に苦しんでる人はいないと
そう思ってるの？
自分の傷をそれ以上自分で広げないで

雨が降る
さらに強く降る
遠くに見えてた
空の切れ目が見えなくなった

もし後悔しないヒトがいたなら
それはヒトじゃなくて
機械でしょう
何事も指示された通りに動く
自由は与えられない
鉄のからだ

雲が割れた
その隙間から
見えた僅かな光

僅かだがとても明るい輝き

君だけじゃないんだ

今、抱えている思いは

もし今後悔してるのなら

あなたが生きてる証だから

一生懸命生きている

誰からの指図も受けない

天翔る鳥より自由な

青い空

僕だけじゃないんだ

錘を心にくくりつけているのは

雲が流れた

大きな太陽が

注いだ眩しい光が
僕らを照らし出す

悪魔

この感情をどの様に
綴ればいいのか
わからない
苦しい
やだよ
なんで
こんなにも
自分を殺して
笑ったのに
自分じゃない
自分を作ってまで
頑張ったのに
なんでよ
私だけ

救われないの
どうして
あなたと関われないの
嫌われたくないよ
好んでよ
こんなにも
頑張ってるのに
なんでだよ
なんで嫌うんだよ
何のための
自分なんだよ
本当の自分は戻ってこない
犠牲は大きすぎて
手にしたのは何一つない
知りたくもない

事実
なんで私に話す？
心に秘めとけばいいんじゃないの
何故
私に関わる
嫌いならほっといてよ
私を笑って何が楽しい？
それならば直接
私に刃を向けろよ
殺してしまえばいいじゃん？
存在意味なんてないんでしょ
私を好きなヒトなんていない
友達なんていない
私を知ってるヒトは誰もいない
消えても誰も気づかないんじゃない

こんな思いなら死んだ方がましかもね

なんだよ

もういいよ

どうして

諦めたい

全てを放り出して

たった一人で生きたい

私が人を欲すれば嫌われるから

こんな痛み抱えるくらいなら

もとから一人がいい

あなたに好かれようと

努力しても救われない

無駄だって

消えられたらいいのにね

闇に一人落ちたい

心なんてない
必要ない
自分を捨てる
必要ないでしょ
私、
生きてないから
ヒトは誰かに頼って生きてる
一人では生きていけない生き物
だから私はヒトじゃない
その前に生きてない
存在を消してほしい
私は人を愛しても
愛してもらえないから
あなただって
私は必要ないと

だから
私が誰かを
愛すことはもうない
二度とない
自分もない
取り戻したくても
取り戻せない
誰のせい？
わかってるんだよ
あんたのせい
だが私はあんたに
何もしない
群れてしか生きれない
弱い奴を相手にするなんて
馬鹿らしいから

私はそこまで醜くない
神さま
祈りはしない
誰が祈る？
それは弱い奴がすることだから
悪魔が私の味方に付いてる
魂なんていらない
悪魔と手を結んだ時点で
私は醜いのだろう
じゃぁ、ない心を
埋め尽くすよう
闇を飼おうではないか
心が少し残ってたから
感情があったんだ
そっか

こんな楽な気持ちはない
さぁ復讐を遂げようか
許しをこう
頭に刃を落とす
醜いでしょう
誰が？
そんなこともわからなくなった
心がないから
悪魔に操られる
それでもいい
この感情を理解できるものは
いないだろう
わかってほしいとも思わない
世界が私だけなら
よかったのに

さぁ私を闇へ
連れていけ
私の愛す
孤独の闇へと
落とせ
私はそこで孤独を
一生、愛す

アリス（前書き）

アリスってキャラクターだけで話はあんまり知らないんですよね（；゜Ｏ゜）空想アリスです（・∀・∩）

アリス

叶えることはできない
鏡に寄り添う
不思議な空間
誰も私を見てくれない
見てくれる人もいない
自分さえも私を見れない
鏡に寄り添った
私の姿は映らない
手をあてた
白い腕
確かに眼には映るのに
鏡には映らない
流れる蒼い雲、白い空

私の前を駆けた影
白いうさぎ
私以外の存在
追いつけない
まるで風のよう
白い光
追いつきたい
貴方だけに見てほしい
私の姿

届かない望み

風より速く駆ける
貴方を私のものにしたい
ずっと私のそばで

私を見てほしい
眼にも映らなくなった
探せども見つからない
飲み込まれる異空間

太陽と月
同時に二つが現れる
白い星は赤く光る
白い太陽に紅い月
それを見分ける基準は
なんなのだろう
相談する相手さえいない

光が消えた
白いうさぎ
貴方が消えた

何も見えない
映らない

太陽も月もない
始めから
闇にいたことは
分かっていた
だけど
見ないようにしてた

白いうさぎ
貴方さえも私の欠片？
判らない

自分で作った
月と太陽

一人じゃ寂しいから

色を逆にした

自分は違うって

そのことを

示したい

決めつけられた

運命を

歩むのは嫌だ

他人が作った

道の上を

なぜ進まなければならない

誰も分かってくれない

そんな世界より

解るものがいない

世界のほうが
素敵

幻か

白いうさぎ

貴方を追いかけて

永久に

☆短編集

『籠の中』

大きな鳥籠
広い空間
必要なものは揃ってる
毎日暗くなると寝て
日が昇ると目覚める
明日は来ない
昨日が終わらない

不自由はない
外に出る必要がない
出られない
鍵がかかってる

冷たい鉄の扉
鳥が自由を望むのなら
それは酷く悲しいこと

翼が折れた
飛べない鳥は哀れなのでしょうか
では跳ぶことを覚えようか
新しい希望となるように

昨日が終わって
今日が来た
だとしたら明日も来るのですか
夜に太陽が顔を出した
だとしたらそれは明日が来た
示しとなる

ーーーーーーーーーーーーーーー

『雲の上』

空よりも高く飛んだら
どこに行くのだろか
たどりつく場所は
宇宙？星？
鳥だってそんなことできない
知らない
鉄の塊が空を貫く
宇宙に行けても迎えられてはいない
かってな創造

ーーーーーーーーーーーーーーー

『放浪』

朝の日差しのなかで

孤独にさいなまれ
生きる道を失う

日が注すそのなかに
立ちつくす
希望さえもてない

夕闇せまるそのなかは
無数の憎しみが溢れ
前を見ることさえ苦痛になる

光が消えた闇のなか
また一つ生まれる
心に巣くう黒い影
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『生死』

星を数えてた
死ぬのが急に怖くなった
怖くて怖くてたまらない
人はいつ死ぬの
分からないからすごく怖い
死んだらどうなるの
未知が怖い
見えないものは全部怖い
もし死後の世界が分かったら
私は何一つ怖くないと思う
それは私だけじゃないだろう
怖くない
自分に言い聞かせる
死ぬのはいつ
明日、明後日？

それとももっと先？
やっぱり怖い

星が流れてきた
星は死者の数と等しいのだろう
何千、何億
計り知れない数
その人達は怖くなかったのだろうか

恐怖にまみれて死ぬなんて
死そのものが恐怖なら
死ぬのは安心じゃないのか
その恐怖から解放される唯一の時
そう思ってもやっぱり生きたい
死ぬのがもっと怖くなった

☆短編集０２（前書き）

なんか自分でも訳わからない詩があります（＝＿＝；）

☆短編集０２

『時々雨』

時間の流れに身を任せ
ゆったり歩く平凡な日々
何も期待してないし
何か起こってほしいとも思わない
ただこの毎日が続けばいい

朝がきて夜を呼ぶ
太陽は月と交代する
そんな当たり前がずっと続いてほしい

『わたし』

わがままな猫
黒い猫

めんどくさがり
でもって
プライド高め
誰にも負けたくない
強くなりたい
とは思う
けど
努力はやだ
暑苦しいし
楽なのがいい
だから
今日も日陰でまた昼寝
結局昨日と何も変わらない

『パズル』

埋まらないピース探してた
探しても探しても
見つからない

どこに落とした？
大事なピース
探しても探しても
見つからない

自分で作った
最後のピース
やっぱり
少し不安定

『神さま』

最近疲れ気味
人を助けてばっかりだ
人なんかを助けたところで
僕に全く利益がない
それなのに今まで
僕はよく頑張ったと思う

人は願う時だけ
僕の存在を感じて
叶えてやったら
僕がいることすら忘れてしまう
感謝の言葉さえない

それでも人に手を貸してやる僕は
それでもきっと人が好きなんだ

『光』

地を駆ける獅子
太陽を浴びた
光はここに集結し
金色に輝く
紅にそまる爪を牙を
我が生きた証をここへ
高く見上げた空
何を望んだ

『天』

天駆ける鳥よ

高くを望んだか
光注す世界
地を欲したのか
金色の鳥よ
風切る翼
何も望まない
闇、光注す

『代償』

忘れたいから
忘れた
あの大切な記憶も
時間も
消えた
僕の胸の中

ポッカリと空いた穴
もう何が埋まってたか
わからない
自分で空けた穴
不完全
僕の心が
満たされることは
もう二度と
ない

『空色』

淡い青
いつか見た空の色
となりで笑う君は

もういない
悲しみさえも
忘れてしまって
残された記憶は
泡のように
消えるのを待つだけ

『感情』

喜怒哀楽

そんな言葉があるけど
僕はそこまで高性能じゃない
感情が理解できない
記憶さえないのだから

もし心を持つことが許されたなら
僕は何をするだろう
何を望み何を思って感じるのだろう

空にかかる虹色の橋を
美しいと思えるのでしょうか

紅い薔薇

眠れない夜がこんなに孤独だったなんて。

僕はまだ知らない。
いや、知ろうとしなかっただけなのかも。

ねぇ、赤い血はまだ僕の体を巡っている？
傷ってどうやってつくものだっけ？

太陽に拒絶されたから。
それは大きな力の代償と言うべきなんだろう。

望んで手に入れたわけじゃないのに。
生まれる前から決まってた運命だから。

僕が死んだら何人泣いてくれる？
嘘はつかないでね？
本当はだれもいないのかな？

それってすごく哀しいよ。
辛い。でもそれか僕の運命だから。
受け止めるしかないんだ。

僕の味方は闇だけなんだ。そう、明かりなんてない。いらない。
希望、夢なんてクダラナイ、弱いからそれを手に入れようとするんだろ？

僕が生まれるずっと前から決まってた。

それが運命、宿命。

あてはまる言葉はたくさんあるけど、それが簡単に背負うことのできないものだと。
そんな簡潔な言葉で埋まるものじゃないと。

わかってる。

それでも、僕のことを呼ぶの？呼んでくれるの？

あれ？

僕は何を望んでるの？何かを望んでるの？
分からない。分かりたくない。

弱いところを見せられない。見せてはいけない。

矛盾の繰り返しで僕は咲くことができたんだ。
美しいと言って？僕を抱きしめて。

紅い花弁が散る。体から剥がれるように。

自分を抱きしめて、紅く染まる両腕が月の光で影を残す。

紅く染まる地に咲く一輪の花。

悪者

僕は貴方が思ってるほど人じゃない

他人が作り出した僕は
空想であって僕でない

誰が辛いって？
僕の傷を弄んで楽しい？

嗚呼。そうだね
わかってるよ

自分はとっとと逃げ出して
僕を置き去りにする

そんな貴方が憎い
そんな言葉では現せないほど

貴方の首に突き立てる
牙があればいいのに

滴る血を全て飲み干してあげる

紅く染まった貴方なら
好きになれるかもしれない

僕は一人で生ていけるほど強くない

僕が作り出した僕でさえ
空想であって僕でない

何が恐いって？
僕の心を全て知れる？

嗚呼。どうして
わからないよ

刃を振り回して
僕の心に傷をつけていく

そんな世界が憎い
どんな言葉でも現せないほど

世界を全て破壊する
力があればいいのに

壊ゆくカケラを全て消してあげる

砕け散った夢なら
見ることが出来るかもしれない

誰かが無言で僕を抱きしめてくれたら
僕が僕を失うことがなかったなら

刻みつけられた痕を消すことができたのに

でも、もう手遅れだ

明日は光が差すとは限らない

神が作り出した形でも
幻想であって実でない

瞳に入れて？
僕の総てを否定して？

嗚呼。いやだよ
僕を見つけて

涙の粒受け止めて
雨とともに地に流す

どんなものも嫌い
ただの言葉に見出せないほど

内側のほうから融かせる
氷あればいいのに

流れゆく水を全て放ってあげる

溶けた氷の中の水なら
僕も存在することができるかもしれない

誰も僕に触れることができなくなったら
僕をただの形として見てくれたなら
刻みつけた痕を消すことができたのに
でも、もう手遅れだ

断ち

関係なんて必要ない
くだらない
人間なんて裏切りの毎日
それを憎むのは
お前が弱いからだ
そして、それを言う
お前も俺を裏切ってる
消えたい
消してしまいたい
感情の束縛を
絡み合う糸を
すべて断ち切って
お前の形も破壊する

俺が崩れるまえに

感情なんて邪魔くさい

心の形なんてあやふやだろう？

それを型にはめようとするのは

自分が欲しいから

そして、それを壊す

俺はお前を壊したい

崩して、流してやる

感情の束縛を、絡み合う糸を

すべて断ち切って

はやく形を壊したい。

俺が失くなるまえに

俺が見てる空とお前が見てる空

それは同じものでも

互いの瞳に映るのは全くの別物だ。
俺の空はいつも濁っている
澄んだ空など目に映らない
世界を否定し続けて
そこから何も分からなくなった
手に入れたいものも何か分からくなった。
見つけようとして星に手を伸ばすが
その先にあったものは偽物でしかなかった
真実は二度と帰ってこない
歌うことを忘れた鳥のように
俺の声も不必要なものなのだろう
叫んだところで誰にも届かない
手を伸ばしても何も掴めやしない
黒い翼を背中に宿して
命を狩る

俺の存在理由はそれだけだ。

始まりがあれば終わりがある
始まった瞬間から終わりも近づく
終わりがない始まりがあればいいのに
永遠に続く出会い
愛するものを永遠に手にすることが出来るのに
だが、終わりを手にすることが
それが、我が運命ならば
求めずにはいられない
新たな形を
はまり込む綺麗な形を
望まずにはいられない
運命の続きを
美しい形のままで

俺に崩させてくれ
運命に抗う命の光を

仮面を被った俺は
それを二度と脱ぐことはない
過去を断ち切って
闇を進むこと決めた
過去を思い出したくないから
忘れようとしてた
新しい傷をつけることで
世界から逃げようとしてた
一人になることで
他人を守ろうとしてた

絶対征服

俺が望んでた空は高すぎた
伸ばせども手が届くことはない
世界が俺を否定した
俺も世界を否定した
生きている意味を求めてた
運命だって砕ける
今日も空は高すぎた
だから否定したい
間違ってるのは俺じゃない
世界のほうだ
何故それに誰も気付かない
最初に気がついた俺が
世界を変えようか
全てを認めさせる為に

世界を破壊して夢を創る
後から俺について来るな
協力者は必要ない
一人でこなすことに
意味があるのだから
理解出来なければそれでいい
俺の感情は誰にも解らない
理解者は必要ない
孤独を耐え切ることで
意味を見つけるのだから
世界は俺を置き去りにして
流れる毎日の繰り返し
俺一人で創り上げる
理想の世界
俺の世界を

いつも夢を追いかける
いつも逃げられる
指があと少し長ければ
掴むことができる
届かない

いくな、それ以上遠くへ
行かないでくれ

声にならない叫び

空振りした手の平に
汗が流れ落ちた
世界の全てを駆けた
追いかけても届かない

俺には力不足なのだろうか

呆然と空を見上げた

雨が当然降り出した

俺の味方はいない

今更、思い出した

急に苦しくなった

何のための夢なんだ？

何を追いかけていたのか分からなくなった

失ったものに気づいた

あの時にはもう戻れない

目の前の橋が崩れた

進むべき道はどこにもない

嘲笑うかのように雨が降った

強く強く俺を打ちつけた

もう目の前の光に興味はない

☆短編集０３

『絆』

記憶を辿ってた
いろんな色がそこにあった
全部私の好きな色に
染めることが出来たらいいのに
古い記憶の傷を治したい

繋がってる糸を集めた
糸は細いけど切れなかった
それを全部断ち切れたら
思うがままに操れたらいいのに

操られているのは私だと知っていた
けれど、逃れられないでいた
運命を変えるなんて大層なことは
言えないけど自分の傷は癒せるようになりたい

『存在』

俺の目の前、光が駆け出す
俺にどうすることもできない
お前は俺に何を望む
何も出来ない
血を浴びることに慣れたから
そんな俺が憎いんだろ
世界も俺を見捨ててく
味方はいない
暑く燃え上がれ俺の鼓動の音
失いすぎた何かを取り戻す為に
冷たい氷のような俺を溶かしてくれ
未来に進むことができる足を与えてくれ

明日さえも見えない暗がりの中の俺は
何を失い得たのか
答などない
だが、その何かを求めて
永遠に進むことを決めたから
あとにはもう、戻れない

『称号』

特別な存在になりたい

みんなから認められたい
全てが一番だって
力がなければ意味がない

国を変えようたって
才能がなければ不可能だろ

意味のない称号なんていらない
事実だけが欲しい
特別というそのものが

夢ばかり追いかけた
まだ幼くて
現実が見れなかった

今でもまだ
実感はできてない

日常から足を踏み出した
戻れない扉を押し開けて

闇に呑まれた

扉が閉まっていく
俺だけを取り残して

夢が砕け散った
カケラが四散した

細かすぎて一つしか手に出来なかった
見つけられなかったんだ
辺りが暗すぎて
こんな暗い場所で俺は生きてくと
いつの間にか消えた
理性と感情
血に沈んで流れ出た
水の如く
形が無いものほど失った跡が残る
空洞の心
埋まるものを探してる
毎日が明日のためならば今日はなんだろう
疲れた最後に流れ星
夢のカケラに少し似ていた

『朽ちる音』

世界が終わる音を己の耳で聞け
夢はもう終わり
世界が崩れる
瓦礫のように
闇と光が混じる
どっちが強者？
どうでもいい
世界が砕ける
打ち付けられた水のように
飛び散った水しぶき
元の形に戻すのは可能？
出来ないと知りながら試す

『君に』

他人を信じるな

君はそれができないから
苦しいんだって気付いて

人なんて自分以外は皆、同じ
どうでもいいと思ってる

それが人だから
それを憎むのは間違いだ

そしてそのことに置いては君も同じだ

違うのは己の器の形の違い

もう君の器は傷だらけだ
感情が流れ出してしまうよ

満ちることのない感情
鼓動の音に耳澄ませて

意味のない埋め合わせを考えて

NEXTSTAGE

明日なんて欲しくない
次なんて必要ない

今日が終わる
それだけでいい
何も望んでない

明日を求めることに疲れた
自らの体を保つのに疲れた
明日もまた疲れる

疲れの繰り返し
いつになったら解放されるのか

次の場面は快楽か？
苦痛はもういやだ。

蜘蛛の巣のように心に張り巡らされた糸
重く巻きつく

心の束縛を振り払い
鉛を羽のように軽くしたい

鳥が空を飛ぶ
その先へ越えていく

蒼い空が崩れ落ちた
雲はどこに行った？

あんなにも気持ち良さそうに飛んでいた鳥さえも

繰り返されてるＳＴＡＧＥ

やりたくもない第二回戦
欲しいのは出口だけ

入ってしまえば後には引けない

ＲＥＳＥＴしたいよ
世界の秩序を

残り回数はもうない

だから、
せめてヒントが欲しい

目の前の壁を破る答えを
投げてくれ

今宵、月は美しく
蒼を貫く輝く星空
水面には映らない何も見えない

下からのぞく雨のしずくがポツリ
波紋が広がるそれだけを見つめていたけど

ＮＥＸＴＳＴＡＧＥが開かれる
進む道は与えられる
選ぶ権利なんてない
高い塀に囲まれた一直線

ＲＥＳＥＴはもうできない

誰にも声は届かない
誰か、声を拾って

花が宇宙に咲く
紅く紅く小さな蕾

紅い蕾が落ちてきた
目覚める前に

あんなにも誇り高くに咲いていた花さえも

壁が聳え立つ

進むしかないＮＥＸＴＳＴＡＧＥ
欲しいのは力だけ

入ってからも後には引けない
厚い扉の向こう側

ＲＥＳＥＴしたいよ
己の運命を

残り回数はもうない

次の開幕の合図だけに耳を澄ませて

夢

渦巻く世界
流れる星空
遠い天井
だんだん見えなくなる
感覚が狂う
僕はどこに立ってる？
地球の果て
空の中なのか
足場がふらつく
飛んで行った白い羽
掴もうと手を伸ばしたら
バランスを崩して落ちていく
何も感じず

近づく地面
飛び去る星は僕に何を告げる？
空想と現実が
入り混じって
訳が分からない
そんなことで悩むのは
馬鹿らしいと思う？
でもどうすればいい？
こんなちっぽけな僕では
何にも解決することができない
一人で生きれるなんて
強がり言ったけど
そんなの不可能だって
わかってるんだ
星の中で浮かんだ僕は

また訳が分からなくなった
もしかしたら僕も
星のひとつなのかもしれない
小さく光る紅い星
流れ星拾って
身にまとった
少し明るくなれたかな？
そこらの星も全部集めて
僕の体に貼り付けた
キラキラ光るお月さま
僕も君のように光ってますか？
辺りを見回すと
暗い闇だけ
僕は一人さびしいな
お月さまどうか

僕に友達をください
一人は嫌だ
おいてかないで
温かい温もり感じた時には
温かい掌が僕の頭をなでてた
嬉しくて
涙が出そうになった
愛してると
それ以上を
伝えたくなった
掌を握りしめて
顔をすりよせて
抱きしめた
あったかいあったかい
心と体を

重ね合わせて
太陽を作った
見て、お月さま
君より明るくなれたでしょ

合理的

星のない夜は
もう見てられない
目をそらした
背けてはいけないものまで

俺の星はどこへ行った
力が欲しいとき
どうして奪う
不運の連続がおこる
敵、味方関係ない
合理的に判断すれば
どちらが味方かわかる
逆の判断をすれば
背負う荷物が急に増えた

だけど
確かな感覚を感じた
俺が背負うものはなんだ
過去、現在、その先は
こればかりは
何もわからない
合理的に考えられない

不完全な人間なんだ
俺は
まだ形が何もできてない
回りの枠はできないまま
中身だけが満たされてく

人の温もりを感じたのは
いつが最後だったろうか

目の前のことに
捕われすぎて
何も考えられなくなるその前

くたびれた身体に
重い荷物はかなり堪える
それでも俺は
それが捨てられずにいた
捨てようと思えば
簡単に壊すことができるのに
こんなの合理的じゃない
そんなのわかってる

だから俺の星が消えた
だから俺の力が消えた

何も判断できなくなったから
自分を信じる他ない
一筋だった道が
枝分かれして
複雑に入り組んだ迷路になった
進んでも前に行ってる気がしない
むしろ後退してそうだ
そんなこともわからない道
普通ならあきらめるだろうが
俺は違う
普通ではないから
神経が狂ってる
何かがはじけた時から
俺の鼓動は止まったまま
何かを手に入れるため

もがいてもがいて
深く堕ちる

荷物を捨ててしまおうか
そうすれば少しは楽になれるのに
わかっていてもできないこと
それを否定しても
俺にはできないことがある
これほどの力を持っていても
人間でなくても
俺にはまだ心が残っているから
だから、俺は不完全だ

夢の形

蒼い蒼い空に手をかざしたら自分も蒼くなれるかな
白い白い雲を捕まえたら乗せてもらえるかな
そういった決まりなんてない
どうやって決めるの？
どうやって知るの？
はじめは誰？
何で決めつけるの？
やってみたことはあるの？
最初から夢見ないなんて意味分かんない
どうして？
宝石を捨てるの？
ねぇどうして？
ダイヤモンドよりも輝く星を見たくはないの？
それを手にしたいから

私は行くよ
どこまでも
空の果て
空が続く限り
飛んで行って見せるよ
私の背中に生えた翼で
どこまでも飛んでみせる
不可能なんてないのだから
夢を捨てないで
ダイヤモンドを手放さないで
星を数えて
増やして
空にまた返して？
どれだけ増えても構わない
多いほどいいとは言わないけど

少なくても寂しいよね
早く射ぬいて
流れ星
私の心に響け
雨の音
星の流れる夜の雨音
耳にして
僕の心に響く
君の歌声
寂しいのかな？
孤独なんて言わないで
同じ夢を目指せばいいじゃない
一人で欠片を掴んで握りしめて
ガラス破片キラキラ
飛び散った

夢の形なんてどんなの？
わかんないよ
形がなかったらどうすればいいの
どうやって作ればいいの？
模りをしなくちゃ造れないよ
何にも
もっと欲しい
欲しい
何が欲しい？
形がないもの
だから分からないけど僕の中を満たす何かが欲しい
私の夢は大きく広がって行く
一人では抱えきれない
あぁ、逃げないで
僕が手伝ってあげるよ

捕まえてあげる
手をつなごうよ
歩こうか
あの光の追い続けて
僕らは影になる
私の心で光が弾ける

白き仮面（前書き）

小説についての詩です。
ギアスのじゃないですよｆ^｜^；

白き仮面

僕が望んで手に入れた世界は
破壊と破滅しか呼ばない
幸せを追求した形なのに
どうしてこうなるんだ？

子供の時からの夢
血に塗られたあの日から
誰も死なない
紅い血の色なんて見ない
そんな世界を望んだのに

白い死神がまた僕の目の前に
僕の大事な人を奪っていく
僕の叫びはもう誰にも届かない

それならいっそ
君の持つ死神の鎌で
僕の首も取ってはくれないか
やり返す力もない
非力な僕が
生きている意味など何処にあるというのだ？
自分の色なら目を背けることもしないのに
美しいとさえ感じるのに

誰が色は見れない？

他の色全てが

誰が為に刀を抜く？

己だけの為に

僕はただ出口を探してる

ヒト

人間二種類しかいないんだよ
使われるか使うか
ただそれだけ
クダラナイほんの小さな事
自らの努力を怠れば上に行けるわけないだろ
まずそんな奴に上に立つ資格などない
それなのに上に文句を言うお前らを見ているとヘドがでる
天に向かって唾を吐くと自分にかかるんだよ
そんな事もわからないのか？
理屈で考えないで前進すれば見える景色は必ず変わる
屁理屈を言う暇があったら前に進める足を多く踏み出せ
己の足で地面を捕えろ

二度と逃がさぬよう

☆短編集０４

淡い夢抱いてた
ただの夢だとわかってた

私はまだ子供だった
何も分からないまま前進する

周りなんて見ないで
前に見える道だけを世界だと思ってた

道が途切れたらどうなるかも考えず
ただ、進んだ

煌々と
輝く太陽の下
何も考えないで

嗚呼、道が消えた
もう動けない

世界から消えた一つ
私はどこに立ってる？
動けなくなる前に道を作れば良かったのに
そんな後悔は無駄
一つ途切れた道の先端いる
今日もそこにうずくまる
ただ煌々と輝く太陽は今も上にある
☆
苦痛でしかない世界は破壊してしまっても構わないというがそれを成したところでどうなる？
何が変わるというのだ？
世の支配者と君臨したところで何が手に入る？
地位、名声、富、力…
それが欲しかったわけじゃないのだろ？

何が欲しいのか声に出さないと分からない
ただ貴方の瞳の奥に映るのはこんな世界じゃない

☆

世界の中心は変動する
己に重点を置いたとしても
それを永遠と勘違いする
救いようのない自己中心者
抗うことさえできないのに
何に懇願しているという
自分自身に問うても答はでるか
でなければ次に何をするべきか
そんなこともわからなければ
残される道は自滅のみ

☆

作った、笑顔

作った、自身

本当は何をしたいかも忘れてしまった

それほどに

耐え難い苦痛

今ではそれを難無く熟す自分が憎い
真実を告げることのない表情
いつも仮面を被り

内心を奥底へと落とす

表面に浮き上がらぬよう
錘をつけて深い底へ沈める

二度と触れることのないよう
誰かに縋る手を伸ばさぬよう

自らの腕を切り落とす

何の躊躇いもない
何の苦もない

自身の醜い心を永遠に隠す為ならば

身体が崩れようが
朽ち果ててしまおうが構わない

それほどに醜い自身はなんだ？

誰も知らない本当の自分
知らされることのない心

悔いを改めることが出来るのなら
この魂を悪魔に捧げても構わない

漆黒の翼で降り立って
薄ら笑いを浮かべながら
私の首に刃を立てて

私の血が溢れ出す

そして最後の一滴が落ちる音を聞くその時まで

演じ続けよう
悪魔を宿した身体で

天使の笑みを
最高の善人を

この身、朽ち果てるまで

☆

存在を否定されたものはどうすればいい
ただ憎しみだけを募らせて
世界の破壊を試みる

自分を否定したものが憎い
それを育てた世界が憎い

ただ憎しみだけを糧にして
今日の世界を越える
☆

夕日を背中に
ビルを仰いだ
高すぎて
大きすぎて
てっぺんは雲の中

風に押される
ビルの狭間で
強すぎて
圧すぎて
押し戻される

せっかく歩いた道程は無意味
残るのは足跡だけ
☆
感情に抗うのは辛い
それを永遠に堪えるのは苦痛
だからって己をさらけ出すことなんて出来ない
鎖、鎖、鎖
私は己を縛る幾多の業に従うしかないのだから
何かが欲しい
何かがわからない
闇、闇、闇

心はいつも漆黒に染まる
深い深い奈落にいる私には光が射さない
泣き声が聞こえる
何処からかはわからない
☆
喰らいつくせ
自分が欲する全てを
望みはなんだ？
考えるな
自分の欲望をさらけ出せ
☆
死を畏れ
死を想え

扉はすぐ横に

花が咲く

枯れる命を養分に

今日も世界は僕等を乗せて廻る

☆

僕は世界のために

君は明日を繋ぐ橋となれ

翼は休むことを知らず

今日も天を翔ける

☆

僕らに残された時間はあと少し

何がせまってくるかわからない

☆

背中にあったはずの翼は
今はもうない
塵の如く消え去ってしまった
自らの手で消したのだから
何一つ後悔はない

☆

「今、俺には天が味方してる」
神の降臨だ、なんて
何一つわかってないなぁ。
君の背中にあるものはなんだい？
悪の翼じゃないか
醜く黒に染まった無数の羽が
全く、笑えるよね。
天の味方なんて所詮、
偶然に過ぎないんだよ。

神だなんてみたこともないのによく云えるよね？

神なんていないんじゃないの？
だってこの世は悪に満ち溢れている。
これを壊さない神がいるのなら、いないも同然。

だから僕がそんなマヌケな神に変わって悪を叩いてあげる。
だから君はそこで震えていて。
僕がその震えを断ち切ってあげるから、ね。

☆短編集０５

愛が何かわからない

そう、呟いて
今にも泣きだしそうな空を見た

そうして、顔がぬれた
どんどんぬれた

凍えそうだ

だけど、傘もささないで歩いた
持ってなかったから

どんどん溺れてく
雨宿りする場所さえ見つけられない

凍りそうだ

それで自業自得と言ってしまえば簡単で

☆

首に縄をかけて
手足を鎖で縛る

痛みなんてどうでもいいわ
ただ私を束縛して

自由も結構辛いのよ

自由こそが一番の束縛、なんてあなたが言ったのよ？

私に何を求めたの？
それとも…？

嗚呼

あなたの愛を受けたいわ
唇にあなたを重ねて
深く愛して頂戴

☆

前進

泣きたいほど辛いのなら泣いてしまえばいい
逃げ出したいほど怖いなら逃げればいい

だれも咎めなどしない
それがあなたの道だから

あなたのこころに忠実にいればいい

涙が流れた後も
後ろに続く足跡も

すべてがあなたのものだから

一人だなんておもわないで
無理に進もうとしないで
足が絡まってしまうわ

やめて、声をあげて私の胸で泣いて
すべてを抱え込まないで
逃げ道ならここにあるわ！

ただまっすぐひたすらに進んできた道なんて面白くないわ
山があって谷があるそれが人生でしょう？

そう、だから今のままでいいのよ

あなたはあなたでいること
私は私でいることがこの世で最も重要な点よ！

だから手を取って今はただ踊りましょう
進まなくたっていいじゃない
後退だって前進よ

あなたはまだ分かってないだけよ！

さぁ、手をお取り下さい。王子(プリンス)様
王女(プリンセス)様と踊りましょう

握り合った手から伝わる熱が熱すぎて火傷しそうよ

今を楽しく生きればいい
ただ笑えばいいだけよ

ほら、あなたの道の終点(ゴール)が見えてきたわ

本当

本当は何がしたいかなんてわからないんだ
でもじっとしていられなくて。
本当に欲しいものはなんなんだろうって
考えただけで胸が苦しくなるよ。

どうして？
わかない僕の問いは山を作っていくばかりさ。
積もる山を崩そうとしてスコップ片手に穴をあけたけど
全然減った気がしなくて
だから、座り込んで膝を抱えていたんだ。

本当ってなんなの？
わからないから余計に辛いよ
心を締め付けるこの手は僕のものなんだって分かってたよ。

答えを探して走り回って。

小さな石に躓いて、こけて、泣いた。

その石を握りしめて遠くへと飛ばしてしまいたい

振りかぶって投げても飛距離は3メートル。

子供みたいに足掻いて

足掻き切った先には何が待つのだろう。

僕の待つ「本当」はそこにあるのか？

嘘つきです

最近、気付きました
ようやく気付きました

どうやら僕には虚言癖があるようです。

また今日も二つ嘘をつきました
だから二つを本当にしようとしました
朝になっても無理でした

嘘だと打ち明けようと思ったけどその日は黙ってました
次の日も黙ってました
ずーっと黙ってました

そしたらそんな嘘の山が出来ました

東京タワーが富士山になってエベレストになりました。

毎日エベレストは成長します
そして僕は毎日餌をあげます

それは宇宙に届きました
それは太陽を隠してしまいました
だから僕の中はずーっと夜になりました。

必要ですか？

転んでばかりいるこの足が嫌になって足を捨てました。
汚い字しか書けないこの手が嫌になって手を捨てました。
人を傷つける言葉しか吐けないこの口も必要ないと捨てました。
周りの悪口を聞くのも嫌だったので耳も捨てました。

後はなんでしょう。
少しは体が軽くなりました。

けれどまだ不要なものが付いているようです。

どんどん人の手で汚されていく世界を見るのも嫌になって瞳を捨てました。
排気ガスで汚れた空気の臭いも嫌なので鼻も捨ててしまいました。

まだ不要なものはあります。

静かなのが好きな私にとってドクン、ドクンと体に響く音も嫌でした。
だから私は心臓を捨てました。

まだ不要なものはあります。
けれどもそれを取り除くにも体が動きませんでした。

涙の池に

どうして君はそんなに悲しそうに笑うの？
無理して笑う必要なんてどこにもないのに

全てを一人で抱え込んで、いつも周りばかりを気にしている

悲しいときは悲しいと言ってもいいんだよ
辛いときは辛いと言えばいいんだ
その為に僕がいるんだから

ずっと一人で抱え込んで壊れそうになってる君は見たくない

そんな君を見てると僕の方が壊れてしまいそうになる

僕の両手はいつも開いてるよ
君だけを抱きしめる為にずっと

辛いなら泣いたってよかったんだよ
いつも感情を抑え込んで、泣きたいのに笑って

涙の流し方を忘れてしまった君は全て内側にしまい込んで溺れそうになってる

流れに逆らえないまま
君は届かない空に手を伸ばしたまま
沈んで行く

早く僕の存在に気付いて
手は届く位置にあるよ

さあ、僕の手を掴んで
そこから引き上げてあげるから

沈みきってしまう前に
ねえ早く気付いて

……お願いだよ

声（前書き）

声が出ない少年の話

声

僕の声はどこまで届くのか
急に気になって
叫んで、叫んで叫んで
叫んでみたんだ

ちゃんと君に届いたか
すごく気になった
気になって、気になったけど
聞けなくて
すると君は僕の唇に
優しく触れたんだ

聴こえなくても伝わるよ

だからまた僕は叫んでみた
家の中で
庭で
学校で

僕はこんなに大きな声を持ってるんだ

だから僕は繰り返し叫んだんだ
街で
海で
大陸で

僕の声は届いてますか
聴こえていますか

君がたとえ世界の裏側に行こうとも
僕の声は届くから

今日もまた音のない叫びをあげる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8281e/

螺旋階段

2011年11月25日17時53分発行